

制団体として組織変更され、産業組合の歴史に幕を閉じました。戦後は米軍払下げのコンセット（組み立て式かまぼこ型兵舎）を建てて、区事務所兼配給所を置きました。主に塩・メリケン粉（小麦粉）・粉ミルク・米軍野戦用の缶詰等の食料品と、米軍放出物資の落下傘・毛布・軍服等の衣料品が無償で配給されました。1948（昭和23）年には区の事務所と配給業務が分離して運営されることになりました。当時の配給所主任と職員の給料は村役場から支給されたそうです。1949（昭和24）年、配給物資が減らされたところ、恩納共同店の設立準備が始まります。恩納区では共同店を設立するために区民から出資金を募り、生活必需品と配給物資を取り扱う共同店の事務所が完成しました。現在の恩納共同組合の組織は1967（昭和42）年に設立されました（HPもあります）。

南恩納区でも1950（昭和25）年、南恩納共同店の組織がつくられ、共同店の役員が選任されました。1953（昭和28）年には精米所が共同店に統合され、



南恩納区共同店

区民の日常雑貨全般を賄うために機能が拡大されました。しかし、社会が安定して個人商店が出現するようになると、経営が困難となり1972（昭和47）年、解散となりました。

山田区の共同店は、大正から昭和の初期に現在の公民館入口に設置され、字民の株組織で運営されました。商品は主に酒類で、食料品は米、昆布、ソーメンなどでした。日用雑貨はマッチ、線香、ホヤランプの用具等で、種類も多くありませんでした。この共同店は1944（昭和19）年

（昭和19）年度頃まで運営されましたが、太平洋戦争の影響で食糧物資が乏しくなり、また主任となる適任者が軍人、軍属等の召集を受けたため、店は閉店となりました。戦後は米軍の配給を分配する業務を経て、1951年に共同店が発足しました。1962（昭和37）年にはコンクリートづくりとなり、1986（昭和61）年、



旧山田共同店（1982年）

現在の場所に移りました。

真栄田の共同店は、戦後、地域の相互扶助組織として、区民が共同で出資して運営を始めました。売店には生活に必要な日用雑貨や食料品、お酒、清涼飲料、農機具、文房具、衣類、燃料（石油）、木炭、くすりなどが揃っていました。共同店の利益は自治会の運営費として役立て、地域の行事や教育に充てられました。また、利益配当として、株主に配当金を支払う形で運営しました。一時は生活形態の変化によって経営が難しくなり、個人経営となった時期もありましたが、地域にとって共同店は必要不可欠という住民の声によって、現在は店員を区で雇用して運営を続けています。

共同店は地域の環境や事情、産業や行事を支えてきました。共同店から恩納村の地域の歴史が見えてくるのではないかと思います。（幸喜）

【参考文献】

- 『南島文化』創刊号1979年 沖縄国際大学南島文化研究所
- 『恩納村誌』1980年 恩納村役場
- 『いやしの里 名嘉真』2012年 名嘉真区
- 『とよむあふす 安富祖字誌』2001年 字誌「とよむあふす」編集委員会
- 『恩納字誌』2007年 字恩納自治会
- 『恩納村字大田区 五十年のあゆみ』1996年 五十年のあゆみ編集委員会
- 『真栄田誌』2017年 真栄田区自治会
- 『南恩納区35周年記念 35年のあゆみ』1980年 南恩納区
- 『共同店ものがたり』2007年（株）伽楽可楽
- 『共同売店の新たなかたちを求めて―沖縄における役割・課題・展望―』南島文化研究所叢書4 2020年 沖縄国際大学南島文化研究所
- 『字誌山田』2019年 字山田区自治会